第58回「おかねの作文」コンクール

秀作

叱られて知った、見えない価値

静岡県・静岡市立城内中学校　３年　山本　陽菜

「あなたは、親もお金もなくなったらどうするつもりなの？」

その一言が、心にずしんと響いた。

私は最近、少しお金の使い方が荒くなっていた。コンビニのスイーツ、友達との寄り道、ＳＮＳで見つけた可愛い雑貨。本当に必要なものではなかったけれど、「ちょっとだけなら」「みんな買ってるし」と、自分に言い訳しながら使っていた。

ある日、いつものように友達と帰りに寄り道して、フルーツサンドを買った。５００円以上したけれど、「映(ば)えるからいいや」と軽く考えていた。家に帰ると、父が冷蔵庫に入っていたそれを見つけて「またこんな高いもの買ったの？」と一言。その日はそれだけだったけれど数日後、私の財布の中身が空っぽなのを見て、父はついに本気で叱った。

「そのお金、全部親が働いて稼いだものなんだよ。無限にあるわけじゃない。あなたは親もお金もなくなったらどうするつもりなの？」

その言葉を聞いて、私は黙り込んでしまった。「たかがお菓子や文房具に数百円」と思っていたけれど、父の表情は真剣だった。私は改めて、お金のことを考えるようになった。お金は、ただ「物を買うための道具ではない」。親が毎日仕事に行き、時間と体力と精神力を使って手に入れてる、大切な命のエネルギーだ。一枚一枚には、朝早く起きて出勤する眠い目、気を遣って働く心の疲れ、帰ってからも家族のために動き続ける姿が詰まっている。それを私は何も考えず「ちょっとくらいなら」と浪費していた。

実は前に一度、父が体調を崩して寝込んだ日があった。普段は熱すら出さずぴんぴんしている父が、布団から起き上がれない姿はショックだった。私が「晩ご飯どうしよう」と言ったとき、父はつらそうな顔で「冷蔵庫にあるもので何とかして」と言った。私は初めて、料理や片付けが当たり前ではないことに気づいた。

©J-FLEC2025

それと同じで、お金ももらって当たり前ではない。今まで使い道は自分の自由と思っていたけれど、それは親が信じてくれているからこそだ。だからこそ、使い方には責任がある。ただのお小遣いでもそれは「信用」の上に成り立っている。

父の言葉の中には、怒りだけでなく心配や愛情が込められていた。将来自分が働くようになったとき、お金のありがたみを知らなければ困るのは自分。だから今のうちに伝えたいそんな想いがあったのだと思う。

私は将来、薬剤師になりたいという夢がある。でも、そのためには長い時間をかけて勉強し、大学にも通わなくてはいけない。入学金や学費、生活費。すべてにお金が必要だ。今のままの感覚ではとてもやっていけない。お金は便利で、確かに生活を支えてくれる。でも親の愛情や友達との信頼、感謝の気持ちといったものは、お金では買えない。むしろ、そういう見えない価値にこそ、人生の本当の豊かさがあるのだと思う。父に叱られた日は少し落ち込んだけれど、その中に「あなたをちゃんと大人に育てたい」という父の願いが感じられた。言いにくいことをあえて伝えてくれるのは、何よりの愛だと気づいた。

これから私は、お金だけでなく支えてくれる人の想いや努力にも目を向けていきたい。そして、自分が大人になって働くとき、「あのとき父が言ってくれた言葉」を思い出せるような人でありたい。心のこもった一言が、私の中に本当の価値を教えてくれた。今はまだ未熟だけれど、あの日から少しずつ本当の意味での豊かさを考えるようになった。お金の裏にある努力と想いを、私はずっと忘れずにいたい。

©J-FLEC2025